

ヘンリー・ヴォーンの詩 The World に おける永遠と時間

西村 尚

わが国には馴染みの薄い神秘主義は、ヨーロッパに於て、すでに長い歴史を持っている。遠くギリシャのプラトンやプロティノス以来、神秘主義はキリスト教と結びつきヨーロッパに広まったとされる。これについては、すでに数多くの研究書が、出ているのでここでは触れないでおく。英文学においては、十四世紀に神秘主義文学が黄金時代を迎えていたが、十五世紀頃には衰微¹⁾していた。

次に神秘主義文学がイギリスに花咲いたのは、十七世紀であった。この時代は、すぐれて宗教的な時代であり、瞑想詩や、John Donne の説教集や、Thomas Browne や Jeremy Taylor の散文などの宗教色の濃い著作が豊富に散見される。詩の分野で神秘的な思想系統に属するのは、その頃栄えた Metaphysical Poets である。John Donne (1572) が、最も有名であるが、その他に George Herbert (1593—1633), Richard Crashaw (1613?—1649), Henry Vaughan (1622—1695), Thomas Trahern (1637—1674) である。ここで Metaphysical と言うのは、抽象的な形而上学を指すのではなく、理屈ばいと、抽象的すぎるとか、多少非難の意味を込めて用いられたことは、最初にこの名前をつけた Samuel Johnson 以来、有名である²⁾。

さて彼等の中で最も神秘主義的な要素をもった詩人は、Vaughan であるといわれる³⁾。彼は、所謂自然神秘主義詩人の一人であり、その神秘主義的自然観は十九世紀の Wordsworth や Swedenborg の影響を受けた Blake にまでつながる。Vaughan や Wordsworth の詩は、批評家により、しばしばその類似性が指摘され比較されてきたが、前者が、自然観はキリスト教がベースにあるのに対し、後者は、汎神論に基づいている点で相違している。

ともかく、十七世紀イギリスの作家達、とりわけ、Vaughan にしろ、Browne にしろ自然は、神の作品であり、静寂と無垢の世界である。Vaughan は、自然の中に「永遠の影⁴⁾」を見いだす。彼等は、さらに永遠の向こうに死を見ていた。死に取り付かれていた Donne をして「死よ、奢るなかれ」と Holy Sonnets の中で言わしめた。

このように中世から十七世紀まで、さらに十九世紀の Wordsworth や Blake、二十世紀の初頭まで生きた Francis Thompson に至るまで神秘主義の炎は燃えつづけた。この系譜の中で Vaughan の有名な神秘的な詩 The World を論ずるのを目的とするものである。

The World (世界) の冒頭部は、ヴォーン神秘主義を示す詩行としてよく知られている。

I saw Eternity the other night

(私は、先日の夜 永遠を見た。)

この一句は、読み手に強いインパクトを与える詩行であるが、Douglas Bush は、まるで I saw John Brown the other day. というように、会話的表現というほかないと述べている。彼は、

これを casual sublimity（さりげない崇高さ）と表現し、さりげなさ⁵⁾と崇高さという一見矛盾したものが一体となっているところにこの句の絶妙さがある。

それでは、永遠とはどのようなものだったのであろうか。それは「大きな光の輪」のようであり、その下に時間がめぐり、その「時間」の中に世界が投げ込まれて、いっしょに回転している。

I saw Eternity the other night
 Like a great Ring of pure and endless light,
 All calm, as it was bright,
 And round beneath it, Time in hours, days, years
 Driv'n by the spheres
 Like a vast shadow mov'd, In which the world
 And all her train were hurl'd;

Ring「輪」は、永遠を象徴しており、それぞれ年、月、日という時間に分けられるというプラトニズムがその背景にある。⁷⁾ヴォーンの場合、The Nightに見られるように、新プラトン主義の影響を受けているのが多いけれども、ここではプラトニズムがそのベースにあると考えられる。

この詩行としばしば引き合いに出されるのは、ロマン派の詩人 William Blake の「無心の前触れ」(Auguries of Innocence) の作品の冒頭の有名な四行であろう。

To see a World in a grain of sand,
 And a Heaven in a wild flower,
 Hold Infinity in the palm of your hand,
 ⁸⁾
 And Eternity in an hour.

この一粒の中に永遠を見るブレイクの神秘主義は、ヴォーンの上記の詩と同じ思想に基づくものといわねばならない。とりわけ、ブレイクの詩は、東洋人の心に強く訴えかけるものがあり、これが仏教思想と酷似していることは研究者によってすでに指摘されている。⁹⁾ブレイクのような神秘家のいう永遠とは、無限の時間ではなく、永遠の一瞬(Eternal Now)であるといえよう。

ところで、The World は、現世的とは言えないヴォーンにしては珍しく世俗的な事柄を取り扱っている詩である。この詩のテーマは、時間および世界の関係にある。すなわち、永遠の世界は、静謐、安定、美と永久不変の世界であるが、反対に、時間の世界は、暗く、実体のない、時間に縛られた世界であって、それぞれ対照的な概念である。

この詩は、神秘の世界から陰鬱な現世の描写に移るのであるが、対照の効果を生んでいる。斎藤勇博士は、「この幽玄また壮大、そして 'metaphysical' である冒頭に比べれば、月並みにくどきたてる恋人は何という anticlimax であろう」と評され、詩の釣り合いがとれていないことを指摘されている。¹⁰⁾

これに対し、A. J. Smith 氏は、「しかし、詩の冒頭のはっと思わせるようなさりげなさや、想像力の抑え切れない前進、これらは、二つの部分から成る conceit の絶対的対照が並置されている点から我々の眼をそらしている」と述べ、¹¹⁾冒頭の大膽奇抜な conceit が読み手につよい印象を

与え、この詩のポイントであると弁護している。また竹友藻風博士が、「『黙示録』の一節にも比較せらるべきものである。」と感嘆¹²⁾されている。

さらに Smith 氏は、同論文の中で、この The World とダンテの「神曲」天国二十七編との類似を指摘¹³⁾している。

十七世紀英国の詩人、文人達にとって、時間と永遠の問題は大きな関心事であったであろうが、ヴォーンほど eternity-conscious な詩人はいなかったのではなかろうか。

第二スタンザ以降になると、現世の陰鬱な個別描写がのべられている。「愛に溺れた恋人」であり、「陰鬱な政治家」であり、「恐れまどう守銭奴」であり、また「底抜けの食道楽」である。Rudrum は、この政治家は、あたかも眼が見えず、獲物を捕まえ、自分の歩いた道を発見されないように、地下でうごめく mole のように、政敵を次々に倒してゆくマキャヴェリ的な人物であるとしているが¹⁴⁾、当時の状況から考えてクロムウェルと思われる¹⁵⁾。

守銭奴の部分では、聖書のマタイ伝6章20節に拠っていることは明白である。

Yet some who all this while did weep and sing,

But most would use no wing.

O fools (said I,) thus to prefer dark night

To live in grots, and caves, and hate the day

Because it shews the way,

The way which from this dead and dark abode

Leads up to God,

A way where you might tread the Sun, and be

More bright than he.¹⁶⁾

Smith は、「恋人」と「守銭奴」については、迫力ある描写や具体性を欠いており、またクロムウェルといわれる「政治家」は、邪悪な政治家をよく捉えている¹⁷⁾。確かに政治家については、当時の人々の政治家観を表わして興味深いものがある。ピューリタン革命の英雄も当時の人々からどのように見られていたかを物語るものと言えよう。

輪 (the Ring) の中に舞い上がりながら翼を使おうとしなかった者たちについて「真の光」よりも「暗い夜」を好み、洞窟の中に住み、行く道を示すがゆえに昼の日を嫌う¹⁸⁾。

そして、神に通じる道、つまり、「太陽を踏み/太陽よりも明るくなるかもしれぬ道」を避けるのが批判される。

詩人が、かれらの「狂愚」(madness) について語る時、ひとつの声が次のようにささやいた。

This Ring the Bride-groome did for none provide

But for his bride.¹⁹⁾

弱い存在である人間が救いを得るためには、キリストと婚約しなくてはならない。しかし、その前に人は世俗と絶縁する必要がある。世俗から離れキリストと婚約することによって、花婿であるキリストは、花嫁たる信徒に指輪を贈った。

つまり、「純粹、無限の大きな光の輪」は、キリストから信徒に贈られた指輪だった。この輪

は、大部分の人間には手にいれることはできないことがほめかされているが、世の欲ではなく神であるキリストの意志に従うことによって救われることがしめされる。この点について Post は次のようにのべている。

Instead of being a prophetic mediator of divine experience, separate from but with special access to God's ways, Vaughan's visionary enthusiast is finally absorbed into the will of God, his voice overridden by that of the Bible, the supreme vehicle of understanding.²⁰⁾

すなわち、ヴォーン的神秘主義は、聖書と神の意志に吸収されることになる。しかし、キリスト教の教義は、神秘主義への没入を妨げているのだろうか。この点については、Bush 教授は、次のように述べている。

Vaughan's understanding of human restlessness and weakness, his Christian faith and Christian effort do not dull his feeling for the mystery of existence, but they do prevent his losing himself in soft idealism or naturalism.

His moments of intense contemplative vision are not moments of auto-intoxication or escape. His steady white light, the shadow of god, is not the damp and flickering gleam of romantic gropings toward a vague infinity.²¹⁾

つまり、キリスト教の教義は、神秘主義への没入を妨げるものではないが、ロマン派詩人のように夢幻の世界に浸って我を忘れていたわけではない。また前者の希求するものが純白の光の国たる「約束の地」(The Promised Land) を目指しての旅路であるならば、後者のそれは、漠々たる無限の世界の模索であると Bush 氏は指摘している。ヴォーンにとって、white light の彼方に神の影を見、キリストの御姿を仰いでいたのではなかろうか。

船木教授が、この点について「キリスト教の教義が、神秘主義への没入を妨げていると言うべきか、その権威が神秘主義を押しつけていると言ったらよいか。これは見のがせない点である。」²²⁾とされる問題提起に対するひとつの解答といえようか。

ともあれ、ヴォーンにとって、神を愛することは、俗世と断絶することである。大部分の人間は、墮落し救われないが、Ring を得た少数の者だけが救われるという。神を信ずる者にとって、俗人の必要とする恋愛も、金も、政治も、性の喜びすらも要らない。後悔と神への賛美こそが、救いの手段であり、他のものは、身の破滅となる。これは、まさに正統的キリスト教の教義であるが、それにしてもヴォーンの俗世への弾効の感情は相当強烈なものといわねばならない。

ヴォーンにとって、俗世よりもキリストを愛する者だけが、光の世界へと導かれてゆく。名詩 The World は、地上からの脱出と魂の天上への上昇、つまり、昇天のイメージを示しているが、結局のところ、キリストへの愛の賛美であり、世俗の侮蔑であったといえよう。彼の他の詩と同様、この詩においても、ヴォーンは、星の彼方の世界を見ていたといえよう。

注

1) 倉長, p. 313.

2) 中野, p. 126.

- 3) 倉長, p. 315.
- 4) Bush, *English Poetry*. p. 67.
- 5) Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century*. p. 147.
- 6) Martin, p. 466.
- 7) Jowett, pp. 257-8.
- 8) 山宮, p. 92.
- 9) 山宮, pp. 257-8. 注釈者は、ここで仏典の一節を掲げてその類似性を指摘している。
- 10) 中野, p. 272.
- 11) Smith, p. 303.
- 12) 藤井, p. 196.
- 13) Smith, p. 299.
- 14) Rudrum, p. 580.
- 15) 楠瀬, p. 135.
- 16) Martin, p. 467.
- 17) Smith, p. 306.
- 18) Rudrum, p. 581. Rudrum は、ここで、ヴォーンが、プラトンの『国家』第5巻の有名な洞窟の譬え話が念頭にあるのではないかとこのべている。
- 19) Martin, p. 467.
- 20) Post, p. 130.
- 21) Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century*. p. 147.
- 22) 船木, p. 58.

参 考 文 献

- 1) 倉長 真『中世期に於ける英吉利神秘文学』1940, 東京 教文館。
 - 2) 中野好夫他編『斎藤勇著作集第四巻, イギリス文学論集1』1975, 東京 研究社。
 - 3) 山宮 允注釈『ブレイク詩選』1974, 研究社英米文学双書11, 東京 研究社。
 - 4) 藤井治彦編『竹友藻風選集第1巻』1982, 東京 南雲堂, p. 196.
 - 5) 楠瀬敏彦『詩と信一ダンをめぐる詩人たち』1971, 京都 啓文社。
 - 6) 船木満州夫『ヘンリー・ヴォーンの詩』1983, 仏教大学人文学論集所収。
 - 7) 巽 豊彦『人生の風景』1996, 東京 南窓社。
 - 8) 松浦直巳編『英米文学との出会い』1983, 京都 昭和堂。
 - 9) 須藤信雄「英文学と宗教・倫理」1966, 東京, 興文社。
-
- 1) Bush, Douglas. *English Poetry*. University Paperbacks. rpt. 1961. (London: Methuen).
 - 2) Bush, Douglas. *English Literature in the Earlier Seventeenth Century*. rpt. 1948. (Oxford at the Clarendon Press.)
 - 3) Jowett, B. trans. *The Dialogue of Plato. Timaeus* 37. 4th edn. (1953), vol. III.
 - 4) Smith, A. J. *Appraising the World*. (Rudrum, Alan. ed. *Essential Articles for the study of Henry Vaughan*. Hamden, Conn Archon Books. 1987)
 - 5) Martin, L. C. *The Works of Henry Vaughan*. 2nd edn. 1957. (Oxford at the Clarendon Press.)
 - 6) Rudrum, Alan. ed. *Henry Vaughan. The Complete Poems*. (rpt. 1983. Penguin Books.)
 - 7) Post, Jonathan F. S. *Henry Vaughan. The Unfolding Vision*. 1982. (Princeton UP. Princeton, New Jersey.)